
今は亡きドワーフ村の思い出

たすく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今は亡きドワーフ村の思い出

【Nコード】

N0752Z

【作者名】

たすく

【あらすじ】

闇の女神シーレンの復活……崩壊した故郷……故郷へ帰ってきた一人のドワーフが昔を思い出す……

自サイトより転載。MMORPG「リネージュ2」を元に独自設定
テンコ盛り注意。

第一話 帰郷

ここは異世界。エルモアデン大陸という巨大な大陸。

そのエルモア地方遙か北。四方に高い山脈に囲まれた外部から遮られていたスパイン鉱山地帯がある。

そこには『大地の種族』と呼ばれるドワーフ族がすむ村があった。常に『強い勢力に味方する』政策をとってきたドワーフは他の種族に嫌われているが、彼らの持つ組織力と経済力が巨大な力を持っていた。ヒューマンが支配した現在においても。

しかし、事態は一変したのだった。

シーレンの復活――

過去、ドワーフたちにより討伐され眠りについた『アースワーム・トラスケン』が復活する。シーレンの命を受けたトラスケンはドワーフ村を襲い壊滅されたのだった。

シーレン復活による疫病に打ち勝つことができたドワーフであったが、トラスケンにはかなわない。ドワーフの長老たちは村を捨てることを決める。

そして神聖な力によって保護を受けているといわれる『話せる人の島』へ出向き、再起をはかることになった。

ある日、ドワーフが一人、元ドワーフ村へ帰還した。長く旅へ出ていたのだが、ドワーフ村壊滅を聞き、戻ってきたのだった。

「なんてこと……」

建物は全壊状態。しかもトラスケンと戦ったであろう仲間たちの死体が点在している。

時々、トラスケンのいびきか寝返りか、ものすごい音を立てて地面が揺れる。

「墓も作れる状況じゃないんだね。ごめんね、みんな」

元村の中を歩きながら、そうつぶやき、まだ村にいたことを思い出したのだった。

知った」が露店で売っていた武器。格闘武器と呼ばれるドワーフ村には売ってない武器であった。

「ふう、疲れた」

その場にぺたんと座る。

「さすがに痛いなー。でも、確実にダメージを与えられるからいいかな」

格闘武器は両手武器のため、盾を持つことが出来ない。相手が攻撃をミスをする以外、確実にダメージを負ってしまう。オークらしい武器ともいえる。

「相変わらず、殴ってるねー」

知り合いのドワーフがやってきた。こちらは槍を持っており、モンスターをかき集めては一気に倒すという、別の意味で豪快な狩りをするドワーフだった。

「まあね。で、今日はどうしたの？」

「んー。そろそろ、転職時期だと思って」

「転職？」

「うん。貴女もそろそろ、その時期じゃない？ どっちに進むの？」

「うーん???」

ドワーフは駆け出しのドワーヴンファイターから、収集系のスカベンジャーと製作系のアルティザンに転職が出来る。

「ま、時間はあるし。じっくり決めたほうが良いよ。後戻りは出来ないからね」

転職は一回きり。そのあとはさらなる上位職への転職以外ない。

「うん。で、キミはもうどっちに進むか決めたの？」

「アルティザンになろうかと思っているよ。制作楽しいし」

「制作かぁ」

「うん。でも転職を指導してくれるドワーフって誰だか知らないから、今探してるの」

「とりあえず、旅に出られる年齢になったらそのまま追い出されるような感じだったしねえ」

「あはは…… それじゃまたね」
そう言うのと彼女は道を走っていった。

座ったまま、彼女は考える。

（転職か……どっちにしようかな……）

（スポイルは楽しいし……クリエイトは……あ、ウッドンアローしか作ったことないや。）

（うーん。やっぱ、自分は製作系は向いてないのかな。）

（スポイル、やっぱ、面白いし。そっちに行くか。）

……意外と単純だった。

ドワーフ村の何処かにスカベンジャーになるための試練を与えてくれるドワーフがいるらしいという情報を得る。

（あの人しか居ないみたいね……）

コレクターピピ。噂ではスカベンジャーを極めるとなれると言うコレクター。真偽は定かではない。

（ま、ただの噂よね。）

「スカベンジャーになりたいですって!？」

ピピに聞くと驚かれた。しかも叫ばれるという。

「あの、そんなに叫ばなくても……」

「それはそれは感心な事なのです〜！ 貴女のように賢い方が少なくなつて、近頃では本当に珍しいのです」

「えと、私、賢くないし……」

「アルティザンになれば、一生人の下で死ぬほど働かされるんです〜。重い財布を拝む事は出来ませんよ〜」

（それはそのドワーフのやり方に問題があるんじゃない？ とりあえず、聞いている振りをして試練の情報を得ないと……）

アルティザンの悪口？や自慢話を散々言い続けるピピ。聞いている振りをしているとはいえ、聞いているのが辛くなってくる。

（まだかな〜）

終わらない。

（ねえ、もう、ゴールしてもいいよね？）

変な電波拾ったり。

（……）

話し続ける事、数時間後……

「では、お話ししよう〜」

（ふう、やっと本題だよ。自慢話は聞き飽きたよ。）

心なしかげっそりした表情。ご愁傷様〜という感じで避けて通行していく仲間たち。

それをしり目に気持ちを入れ替えたのだが……

「実は試練について何も知らないんです〜、てへっ」

ぶち。

キレた。

あれだけ自慢話を聞かされた挙句、知らぬとは。

彼女は、怖い笑顔を浮かべながら、両手に武器をセット。殴りかかろうと構えた。

「サア、シノウカ？」

「ちょ、ちょっと待ってください！！！」
慌てるピピ。

「ナニカナ？」

「スカベンジャーは、マスタートーマだけが承認する事が出来るのです」

「マスタートーマ？」

初めて聞く名前だった。少なくともこの村にはいない。

「マスタートーマです」

名前の訂正をしてくるピピ。

「トーマの行方は彼の妹であるミオンが知っています。聞いてみて下さい。紹介状を渡しますから、おちついてくださいあい」

「はぁ。」

ため息をつくと武器を外す。多少顔色が変わっているピピから紹介状をもらう。

「それでは、頑張ってくださいね」

「次はないですからね」

「は、はい」

（しかし、疲れた：あーあ、日が暮れ始めてるよ：朝一で来たって言うのに：腹減ったな：）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0752z/>

今は亡きドワーフ村の思い出

2011年12月2日21時45分発行